

## 風のごとく一馬と旧約聖書一

池田 裕

Like the Wind: Horses and the Old Testament

Yutaka IKEDA

キーワード：負のイメージ、イスラエルのアイデンティティ、ソロモンの馬、太陽の戦車、アサヤフの印章

Key-words: negative images, Israel's identity, Solomon's horses, the chariot of the sun, Asayahu's seal

「見よ、<sup>むらくも</sup>群雲のようにそれは上って来る。  
<sup>つむじかぜ</sup>旋風<sup>たなほ</sup>のようだ、その連なる戦車たちは。  
 鷲よりも速いのが、その馬たち」  
 (エレミヤ書4：13)<sup>1)</sup>

## バロメーター

馬は旧約聖書に138回登場する。これは驢馬とほぼ同数であるが、驢馬がしばしば長閑な牧歌的風景を描写の一部として登場するのに対し、馬の多くは恐ろしい戦争との関わりで語られる。驢馬と馬の対照の最もよい例は、平和をもたらすメシア到来の預言として有名なゼカリヤ書の言葉であろう。平和のメシアの乗物に相応しい驢馬に対し、馬に与えられた役割はその引き立て役である。

「見よ、あなたの王があなたのところにやって来る。  
 彼こそ義しく、勝利を得る者。  
 柔和な人で、驢馬に、  
 雌驢馬の子である小驢馬に乗る方。  
 わたしはエルサレムから戦車を、  
 エルサレムから軍馬を断つ。  
 戦いの弓は断たれ、  
 彼は諸国民に平和を告げる」  
 (ゼカリヤ書9：9)

一方、馬が戦争の恐怖との関わりで旧約聖書に最初に語られるのは、出エジプトの物語においてである。すなわち、エジプトを脱出したイスラエルの民はファラオ率いるエジプト軍の追跡を受け、海岸に近づいたところで追いつかれた。万事休すと思われたそのとき、奇跡が起き救われた(出エジプト記14：5-30)。

この出エジプト体験の記憶と共有がイスラエルの民の一つに結び、民族としてのアイデンティティを形成する働き

をした。出エジプトの出来事は毎年春にそれを記念して行われる祭を通し時代から時代へ、世代から世代へと語り継がれ追体験され、ファラオの馬と戦車は出エジプトの体験の象徴となった。「馬」と聞いてとっさに何を想起し何を感じるか。出エジプトの苦難と救済の出来事か、それとも別のことか。実際、馬は、古代イスラエル人にとり自分たちの歴史を振り返り互いのアイデンティティを確認し合う重要なバロメーターの一つであった(図1)。

## オリент世界の中で

出エジプトのイスラエルの民を非常に恐れさせたファラオの軍隊であったが、そのファラオの軍隊も前17世紀初め、ヒクソスの侵攻を受けた時に初めて馬や戦車を見て驚き、その圧倒的力の前に屈辱的敗北を喫したのであった。だが、その1世紀半後、エジプト人は強力な戦車部隊をもってヒクソスを追放し、勢力をシリア・パレスティナにまで伸ばした。エジプトの支配者たちの華麗な戦車や馬の様子は、彼らの墳墓から出土した実物や墓壁に描かれた絵などから存分に知ることができる(図2)。

騎馬が戦場で活躍し出すのは戦車よりもかなり遅れてからと言われているが、人が馬に騎乗する慣習はすでに前3千年紀末のメソポタミアにはあったことが知られている<sup>2)</sup>(Owen 1991)(図3)。また、1987年にシリア北東のテル・レイラン遺跡出土の文献(前18世紀)は、騎馬の発達は従来考えられていたより前に始まっていたことを教えてくれる(Eidem 1991)。

イスラエルはオリエントのどの民よりも遅れて馬を導入



図1 狩をするエジプトの高官。前15世紀後半  
(Wilkinson and Hill 1983: fig.3)



図2 主人を待つ馬、休む馬。前1400年頃  
(James 1986: 33, fig.32)

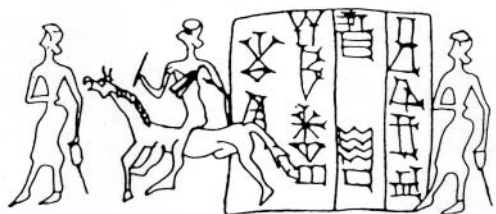


図3 印章に刻まれた乗馬像。前3千年紀末  
メソポタミア  
(Owen 1991: 270, fig.1)

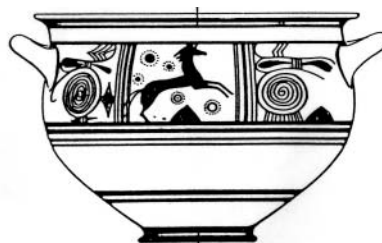


図4 ミケーネ土器と馬。アシュドド出土。前15世紀  
(Dothan and Dothan 1992: 164)



図5 逃げるカナン人戦車兵。前15世紀末  
(Yadin 1963: 196)

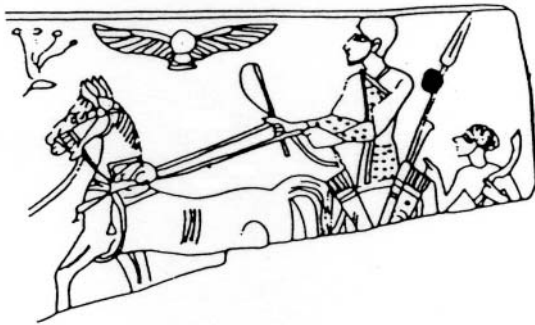


図6 カナン人の戦車と歩兵。メギド出土。前13世紀  
(Dever 1990: 147, fig.48)

した。エジプトを脱出したイスラエルの民は、40年の荒野放浪の時期を経てカナンに定着した後も長い間馬を使用しなかった。ヨシヤがカナン北部の王たちと戦ったときも、カナン軍は大量の戦車や軍馬を使用した。イスラエル側は馬や戦車を全くもたなかった。そればかりか、ヨシヤは捕獲した敵の馬の足の筋を切り、戦車を焼き払った(ヨシヤ記11:9)。ある学者はそれをもって全く愚かな行為であるとさえ言っているが(Azzaroli 1985: 47)、当時イスラエルはまだ国家が誕生しておらず、馬や戦車を保有してもそれを使いこなす技術や余裕はなかったと考えられる。

その後、依然イスラエルに王国が誕生していなかった頃、勇士バラクと女預言者デボラが率いるイスラエル諸部族から集められた兵士たちは、カナン北部イズレエルの戦場で、シセラ率いるカナン軍と対決した。多数の馬や戦車で装備したカナン軍に対しそれを持たないイスラエル軍の劣勢はだれの目にも明らかであった。だが、そのとき、イスラエルにとり思わぬ援軍が現れた。突然大雨が降り出したのだ。戦場を流れる川は氾濫し、あたり一面泥沼と化し、カナン軍の戦車部隊は混乱に陥り、敗走した(図4～6)。

イスラエル最古の叙事詩「デボラの歌」は神話的表現をもって語る-

「星々は、天から参戦し、  
その軌道から、シセラと戦った。  
キシヨンの川が、彼らを押し流した。  
いにしへの川の姿で、キシヨンの川が。  
わが魂よ、力強く進め。  
そのとき、軍馬のひづめが轟く、  
駿馬の群れの、その疾駆する走り・・・」  
(士師記5:20-22)

前1000年頃、イスラエル全土はダビデにより統一され、強力な国家が誕生した。しかし、注目すべきことに、彼はシリアのツォバの王ハダドエゼルの軍と戦ったとき、ヨシヤと同じようなことをしている。捕獲した敵の戦車用馬は百頭を残し、他はすべて足の筋を切ったのである(サムエル記下8:4)。百頭だけ残したのは戦勝の記念とするためであったか、あるいはイスラエル軍も小規模ながら戦車部隊をもとうとしたのであったかは明らかでない。

イスラエルで馬や戦車の導入に初めて積極的に乗り出したのはダビデの後継者ソロモンである。彼は戦車1400台、騎兵1万2千を保有し、それを首都エルサレムおよび地方の主要都市に配備した。知事たちの重要な任務の一つは、それらの馬の飼葉にする大麦と藁を所定の場所に納め常に不足のないようにすることであった(列王記上5:6, 8, 10:26)(図7)。ソロモンはエジプトとクエ(現在のトルコ南東キリキア地方)から馬を輸入した(図8)。特にエジプトからは高価な戦車とそれをひかせる馬とを輸入した。戦車1台600シェケル、馬1頭150シェケルは当時の他の地域の戦車や馬の値段と比べきわめて高価であった(図9)。そうした高価な戦車や馬の一部をソロモンは北のアラム系やヒッタイト系の王たちにも売って利益を得た(列王記上10:28-29)(Ikeda 1982)。しかし、ソロモンの栄華は国民に大きな負担を強い、それが主な原因となって彼の死後王国は南北に分裂した。高価馬を多く買いすぎて家を傾かせてしまったようなものである。

前853年、北王国イスラエルの王アハブは、ハマトの王イルフレニ、ダマスコの王ハダドエゼルと共にシリア・パレスティナの反アッシリア同盟軍を率い、オロンテス川中流のカルカルの戦場でシャルマネセル3世のアッシリア軍と戦った。このときアハブが動員したイスラエル軍は歩兵1万、戦車2000台であった。戦車の数はハマトやダマスコの王たちの1000台をはるかに超えた。だが、われわれがこうした事実を知るのはいずれアッシリアの王碑文のお陰であり(Grayon 2000; Yamada 2000; Ikeda 2003; アハロ





図7 馬の世話をするアッシリア人兵士。前9世紀半ば (Reade 1983: 30, fig.37)



図8 馬頭。カラホック (トルコ南部) 出土  
前1300年頃 (Bittel 1976: 155, fig.162)

ニ・アヴィヨナ 1988: 81)、旧約聖書の記者たちは、アハブが反アッシリア同盟軍の先頭に立って戦ったことについても彼の馬や戦車の活躍についても、一言も触れていない。旧約聖書の記者が語るのはイスラエルの宗教的伝統をないがしろにした悪王としてのアハブである。聖書外資料は、聖書の記述がアハブの一面しか語っていないことを教えてくれる。それは馬の記述についても言えることである。

太陽の戦車、アサヤフの馬

南王国ユダでは、前8世紀後半から7世紀前半にかけて、太陽神礼拝が流行した。しかし、王ヨシヤフはヤハウエ宗教の復興を目指す宗教改革を行い、ユダの王たちが太陽に

	Price in silver shekels	Market	Dating	Source
Chariots	64	Egypt	13th century B.C.	Pap. Anastasi III, 6:7-8
	100	Babylonia	Marduk-nadin-ahhe (1098-1081 B.C.)	BBSi 39, 15
	600	Egypt	Solomon (967-928 B.C.)	1 Kgs 10:29
Horses	300	Qatna	Ishme-Dagan (1780 B.C.)	ARM 5, 20:18ff.
	30	Nuzi	15th century B.C.	Chiera, JEN 515:3
	200	Carchemish	14th-13th centuries B.C.	PRU 3, 16:180
	30 (mare)	Ugarit	14th-13th centuries B.C.	PRU 6, 7B:12
	35 (mare)	Ugarit	14th-13th centuries B.C.	UT 1127:6
	20 (chariot horse)	Anatolia	14th-13th centuries B.C.	HL § 180
	15 (one-year-old filly)	Anatolia	14th-13th centuries B.C.	HL § 180
	14 (un-broken horse)	Anatolia	14th-13th centuries B.C.	HL § 180
	10 (one-year-old colt)	Anatolia	14th-13th centuries B.C.	HL § 180
	4 (weaned colt, filly)	Anatolia	14th-13th centuries B.C.	HL § 181
	50 (mare)	Babylonia	Marduk-nadin-ahhe (1098-1081 B.C.)	BBSi 39, 16
	150	Egypt	Solomon (967-928 B.C.)	1 Kgs 10:29
230	Babylonia	Nabonidus (555-539 B.C.)	GCCI I, 269:1-2	
88 (?)	Syria	Seleucus Nicator (312-281 B.C.)	CT IV, 29d, 1ff.	

図9 前2千年紀と1千年紀の西アジアにおける馬と戦車の値段表 (Ikeda 1982: 226)

献げた馬（の像）をヤハウエ神殿の入り口や前庭から取り除き、さらに太陽の戦車を火で焼いた（列王記下 2 23 : 11）。エルサレムのヤハウエ神殿の庭では、太陽（シメシュ）が日々戦車に駕して天を駆ける様を象徴する祭儀が行われたと思われる。一部の学者は特にメソポタミアの太陽神シャマシュ礼拝との結びつきを見る（Oded 1994: 200）。戦車との結びつきはギリシアの太陽神にも見られる。ギリシアの太陽神は通常、四頭立ての戦車に駕し、手ずからこれを御して天空の道を駆け、日没に至れば西の果ての極洋に入り、巡りめぐって東に帰り着き、朝とともに再び馬を御して天に上るとされた（呉 1969: 43-45）。

ヨシヤフの宗教改革は神殿の修復工事の際に「律法の書」が見つかったことに始まった。「律法の書」は現在の申命記の一部であったと思われる。申命記にある王の規定には、「王が自分のために軍馬を増やしてはならない」と定めている（申命記 17 : 16）。これは王個人のために高価な軍馬を多く買い求め（ソロモンのように）国民に重い負担をかけるようなことがあってはならないということである。

国の力は馬すなわち軍事力の大小で決まるものではない。軍事力だけで国の安泰が保持できるとする為政者たちに対する批判の言葉は旧約聖書に見いだされる。「禍だ、助けを求めて、エジプトに下る者たち。彼らは馬に頼り、数多きゆえに戦車に・・・抛り頼む」（イザヤ書 31 : 1）がそうであり「ある者らは戦車を、ある者らは馬を、しかしわれらはわれらの神ヤハウエの名をほめたたえる」（詩篇 20 : 8）がそうである。また-

「王は兵力の多さでは救われず、  
勇士は力の多さでは救い出されない。  
馬は救済には見かけ倒し」

（詩篇 33・16 - 17）

興味深いのは、ヨシヤフの命令で宗教改革にたずさわった高官の一人アサヤ（列王記下 22 : 12）のものと思われ

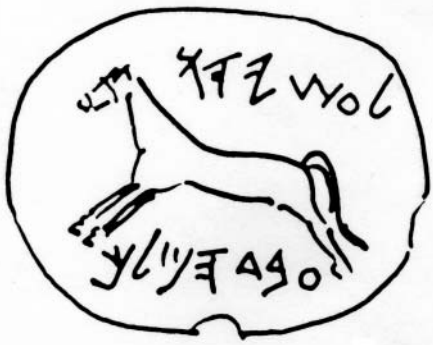


図 10 「王の僕アサヤ」の印章。前 7 世紀  
(Shanks 1996: 38)

る印章が見つかったことである。印章には「王の僕アサヤフ」と記されている。「王の僕」はアサヤの称号と同じであり、アサヤはアサヤフの短縮形である。注目すべきは、印章には馬が駆ける姿が彫られていることである（Shanks 1996）（図 10）。アサヤフは「ヤハウエは成し遂げた」の意であるから、馬は彼の名前そのものの表象ではない。馬が太陽神信仰と関係したものなのかどうか、あるいは印章が太陽神ヨシヤフの宗教改革の前に彫られたものなのかどうかは明らかでない。いずれにせよ、太陽神の戦車の否定は馬そのものの否定ではなかった。アサヤフは個人的好みで馬を自分の徽章にしたのかもしれない。アッシリアの記録がわれわれに聖書の語らないアハブの一面、重要な一面について教えてくれるように、一個の小さな印章が、馬とイスラエルの人々について聖書の記述からは得られない事実を伝えてくれるのである。

アサヤフと共に王の宗教改革に関わった高官アヒカムやアクボルについては、それぞれシャファンの子、ミカヤの子として父親の名前が記されている。しかし、アサヤ（フ）の父親の名前は記されていない。ヘブライ語における「～の子」はいわば「姓」を意味する。シャファンは「岩狸」、アクボルは「鼠」の意である。

動物に関係する人名の例としては他に、たとえば、「ハッゲバーの〔息子?〕アザルヤフ」の印影（前 8 世紀）がある。ハッゲバーは定冠詞付き「蝗」の意。事実、印章には蝗の像が彫られており（Avigad 1997）、蝗は家紋であったと思われる（図 11）。

馬に関連する人名としては、旧約聖書のスースイ（わが（愛する）馬）がそうある（民数記 13 : 11）。ユダ地方（パレスティナ南部）で、おそらくスース「馬」（あるいはスースイ）という名前の代わりに馬の像を用いたと思われる前 8 世紀の印影が数個見つまっている（Barkay 1992）。アサヤフの父親の名前がスースであったかどうかは明らかでないが、アサヤフの印章は馬が彼の家紋であったことを暗示している。

アサヤフの印章に描かれているのは疾駆する馬の像であ



図 11 「蝗家のアザルヤフ」の印影。前 8 世紀  
(Avigad 1997: 140, no.310)



図12 馬頭。アクジブ（イスラエル北部）出土。  
前6～5世紀（Negev and Gibson 2001）

る。疾駆は、ヨブ記の表現を用いれば「蝗のごとく跳ねる」である。ヨブ記の著者は、ファラオやカナンの王たちの戦車の恐怖からも離れ、太陽神礼拝に対する批判とも関係なく、馬を馬それ自身、人間と同じ神の被造物として受けとめているだけでなく、人間が起こす残酷な戦争に利用されても勇猛果敢に戦場を駆け回る彼ら軍馬たちに敬意すら払っている-

「馬は谷間の土を蹴って、力に喜びを覚え、

走り出て武器に立ち向かう。  
恐怖を嘲笑って怖じけることなく、  
剣を前にしても引き返さない。  
彼の上で矢筒が音をたて、  
槍と投げ槍とはきらめく。  
激震と猛りに地が呑み込まれる時にも、  
彼がラッパの音に立ち止まることはなく、  
ラッパが鳴る度にヒヒーンといもなく。  
彼は遠くから戦を嗅ぎつける、  
隊長と号令と関の声を」

(ヨブ記 39 : 21 - 25) (図 12)

#### 風のごとく

ある日、預言者エリシャは師のエリヤフ（エリヤ）と歩きながら話をしていた。すると、突如、火の戦車と馬が現れて二人の間を分けたかと思うと、エリヤフをさらって天に上って行った。エリシャは思わず叫んだ、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、騎兵よ」。だが師の姿はもう見えなかった。風と共に風のごとく去った師。エリシャはエリヤフの肩から落ちたマントを拾い上げ、しばらくヨルダン川の岸辺に立ち続けた（列王記下 2 : 11 - 13）。

エリシャが師をイスラエルの戦車、騎兵と呼んだのは旧約聖書の中で異例。戦車や軍馬を否定的に見る旧約聖書の「常識」が、一瞬、つむじ風で吹き飛ばされたかのようにある。しかしエリシャにしてみれば、敬愛する師を形容するのにそれに勝る言葉はなかったのだ。

エリヤフを連れ去った火の戦車はつむじ風のように天に

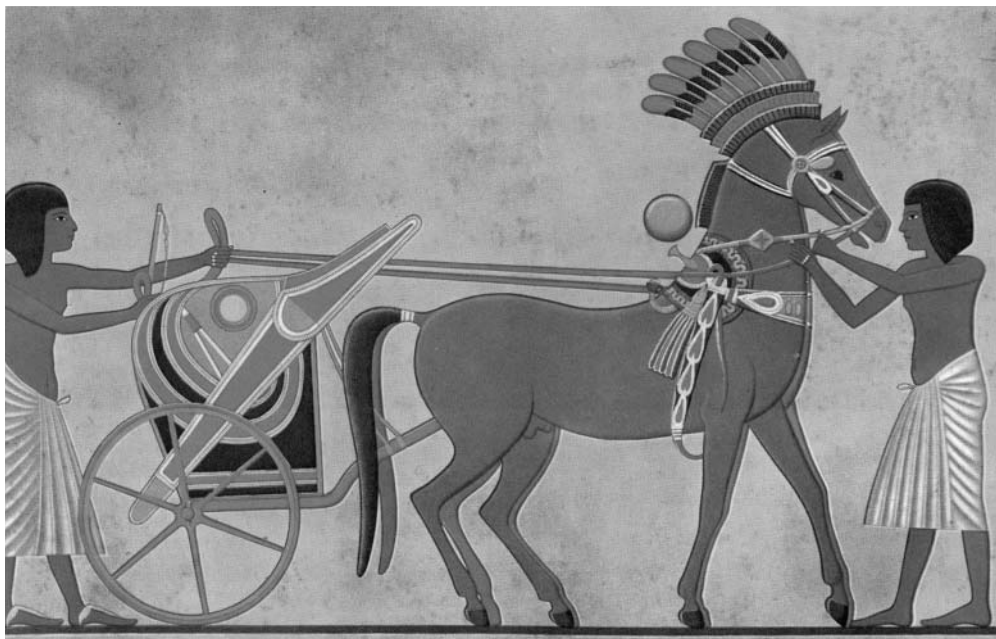


図13 美しく飾られたファラオの馬と戦車。前14世紀  
(Yadin 1963: 212)



上って行った。預言者エレミヤも疾走する戦車をつむじ風にとたえている（エレミヤ書4：13）。預言者ゼカリヤも、四方に向かって風のように駆ける異なる色の馬たちの幻を視た。あの馬たちは何なのか。いぶかしがる預言者の耳に、馬たちは風そのものなのだという声がした。東に向かう赤馬風、北に向かう黒馬風、西に向かう白馬風、南に向かうまだら馬風だと。風は馬のごとく、馬は風のごとく地の四方を駆け巡っていた（ゼカリヤ書6：2－7）。

さて、出エジプトの恐怖の体験の象徴とされたファラオの馬と戦車は巡りめぐって最後にもう一度、旧約聖書の中に姿を現す。しかし、戦争の記事においてではなく、愛の詩「雅歌」の中において。若者は恋人をファラオの戦車をひく美しく優しい雌馬にとたえて言う--

「恋人よ、君を  
ファラオの戦車の雌馬にとたえよう。  
耳飾りのゆれる頬も  
玉飾りをつけた君の首も愛らしい。  
君に作ってあげよう、  
銀をちりばめた金の耳飾りを」

（雅歌1：9）<sup>3)</sup>

雌馬（スーサ）が旧約聖書に登場するのはここだけである（図13）。馬好きの親が生まれた子をわが愛する馬（スースイ）と名づけたように（前述）、若者は恋人をわが愛する雌馬と呼ぶのである。

#### 註

- 1) 聖書の引用は原則として『旧約聖書翻訳委員会訳』I-IV（岩波書店 2004-2005年）による。
- 2) 年代を考察することは有効であると考え。
- 3) 愛馬を美しく飾ることについて、以下の「スー族戦士の歌」参照（C・デイヴィス『馬と人の歴史全書』（別宮貞徳監訳）東洋書林 2005年 117頁）--  
「馬よ、速く走れ  
鳥のように  
速く逃げ  
私を安全に運んでくれ  
敵の矢の届かぬところへ  
そうしたら、  
赤いリボンで飾ってあげよう」

#### 参考文献

- Avigad, N. 1997 *Corpus of West Semitic Stamp Seals* (revised and completed by B. Sass). Jerusalem, The Israel Academy of Sciences and Humanities/The Israel Exploration Society/The Institute of Archaeology, The Hebrew University of Jerusalem.
- Azzaroli, A. 1985 *An Early History of Horsemanship*. Leiden, Brill.
- Barkay, G. 1992 "The Prancing Horse" -An Official Seal Impression from Judah of the 8th Century B.C.E. *Tel Aviv* 19: 124-131.
- Bittel, K. 1976 *Les Hittites*. Paris, Gallinard.
- Dever, W. G. 1990 *Recent Archaeological Discoveries and Biblical Research*. Seattle/London, University of Washington Press.
- Dothan, T. and M. Dothan 1992 *People of the Sea. The Search for the Philistines*. New York, Macmillan Publishing Company.
- Eidem, J. 1991 The Tell Leilan Archives 1987. *RA* 85: 109-135.
- Grayson, A. K. 1996 *Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC II (858-745BC)*. Toronto/Buffalo/London, University of Toronto Press.
- Ikeda, Y. 1982 Solomon's Trade in Horses and Chariots in its International Setting. In T. Ishida (ed.), *Studies in the Period of David and Solomon and other Essays*, 215-238. Tokyo, Yamakawa-Shuppansha.
- Ikeda, Y. 2003 They Divided the Orontes River between Them: Arpad and its Borders with Hamath and Patin/Unqi in the Eighth Century BCE. *Eretz-Israel XXXVII* (Hayim and Miriam Tadmor Volume): 91-99.
- James, T. J. H. 1986 *Egyptian Painting and Drawing in the British Museum*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press.
- Negev, A. and Sh. Gibson (eds.) 2001 *Archaeological Encyclopedia of the Holy Land*. New York/London, Continuum.
- Oded, B. 1994 *II Kings (Olam ha-Tanach)*. Tel-Aviv, Reririm Press. (in Hebrew)
- Owen, D. J. 1991 The 'First' Equestrian: An Ur III Glyptic Scene. *AJSL* 13: 259-273.
- Reade, J. 1983 *Assyrian Sculpture*. London, British Museum Publications.
- Shanks, H. 1996 Fingerprint of Jeremiah's Scribe. *BAR* 22/2: 37-38.
- Wilkinson, C. K. and M. Hill 1983 *Egyptian Wall Paintings*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Yadin, Y. 1963 *The Art of Warfare in Biblical Lands*. London, Weidenfeld and Nicolson.
- Yamada, Sh. 2000 *The Construction of the Assyrian Empire: A Historical Study of the Inscriptions of Shalmanekaser III (859-824 B.C.) Relating to His Campaigns to the West*. Leiden/Boston/Koeln, Brill.
- アハロニ, Y. M. アヴィヨナ 1988 『マクミラン聖書歴史地図』（池田裕訳）原書房。
- 呉茂一 1969 『ギリシア神話』上 新潮文庫。
- 三笠宮崇仁 1988 『古代エジプトの神々』日本放送出版協会。

池田 裕

筑波大学

Yutaka IKEDA

University of Tsukuba